
ドライブ

暗黒女帝・猫又垂氷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドライブ

【Nコード】

N0877J

【作者名】

暗黒女帝・猫又垂氷

【あらすじ】

プチ旅行に出かけた二人。楽しい出かけ先からの帰り道。二人を不思議な出来事が襲った。

ライトホラー系SSです

とある日の夕暮。

友人を載せて、のどかな田園風景の中を進んでいた。遠くには山々が見える。目の前は真つ直ぐな道路と、青々とした田んぼばかり。少しずつ日は傾き、徐々に夜の雰囲気を見せ始めていた。

何度か通った事のある道路であった。

まあ、出発が遅かった為もあって、目的地まではだいぶ時間がかかる。

制限速度ぎりぎりのスピードで、車を走らせる。

まあ、運転し始めて小一時間ほどだったであろうか？

急に睡魔が押し寄せてきた。助手席の友人も船をこぎ出し始めている。が、近場には、車を止めてゆつくりと休めるような場所はなかった。行けども、行けども、山と田んぼばかり。コンビ二一軒見当たらないのである。

ちょうど、隣の県の「お祭り」の帰りの事だった。さほど大きくない町の祭りなのだが、意外と人出は多く、宿をとる事も出来なかったのである。まあ、隣県だから、って軽い気持ちで、「日帰り」の日程だった。

(やべえ〜、居眠り運転になりそう・・・)

うつらうつらとしている、助手席の友人を小突き起こした。

「どっか休めるところ探そうぜ。こっちも眠い…」

友人は、眠そうな目をこすりながら起き出した。

「ん・・・、分かった。でも、ここいらなんもねえからな…」

早朝通った道を逆に辿っているのである。

「わき見運転して、事故つてもいいのかよ〜」

半ば、脅し。眠気がさせる事。

「それやだな・・・。って、あれっ」

友人が指差したのは、「ラブホ」の看板。ご丁寧に、進路と距離

が書いてある。

（あんなの、来る途中にあっただけ？　まあ、道行逆だから、気がつかなかっただけか？）

まあ、足を延ばして眠れるのならいいか……。その看板の示すとおりに、枝道に車を向けた。

道には街頭一つついてない。田んぼの中を、山に向かって進む一本道。

「これ、マジでラブホなんかあんのかね……」

舗装もされていない農業道路。当然のように、車の進むスピードも落ちた。

「まあ、古そうな看板だったからな……」

他人事のように言う友人。

しばらくすると、農道の十字路にぶつかった。

「これってどっち？」

「……。ああ、先の方に同じピンクの看板光って見えるよ……」

確かに、先に見える緩いカーブの陰にピンクの発行物体が見えた。緩やかな上り坂。そのまま車を進めると、やはり看板。【真っ直ぐ850m】って書いてあった。が、進めど、目的の建物らしきものは見当たらない。そして　。何やら、急にガスがかかり始めた。「雨でもふるのかな？」

気楽な口調で言う友人。

空には、満天の星がきらめいている。ガスの様な塊は、地表すれすれから、ちょうど車のフロントの高さで進んでくるのだ。

「なんか、これって……、変じゃねえ……」

突然、カーステレオから雑音が聞こえ始めた。

二人とも、車の中で息をのんだ。

だって、それまでカーステレオのスイッチは入れてなかったのだ。あわててブレーキを踏む。

目の前のガスの塊が、同じスピードで近づいてくる。

「ちよっ、これっ。やばくね」

ガスの濃淡のせいなのか、それはまるで……。

巨大な生首が襲いかかってくる錯覚に陥った。そう、二人とも同時に。車の中に、やけに生臭い匂いが立ち込めていく……。

気がつけば、ギヤをバックに入れて、ものすごいスピードで、あの十字路まで戻っていた。

(これで、方向転換ができる……)

そう思ったのもつかの間。背後から無数の足音が聞こえた。何か、かたいモノ同士がぶつかり合うような『がちゃ、がちゃ』という物音も近づいてくる。

とつさに、十字路を左にハンドルを切っていた。

そう、帰るべき町のある方向。

舗装されていない道路を、出来る限りのスピードで進む。

その先に、街灯が見えた。ついでに舗装道路も……。

(やっと、まともな道に出れるっ)

交通量の少ないのを幸いと、一時停止も無視して、「国道」に合流した。

数分も走らずに、店の明かりが見えた。コンビニだった。

「……、なあ、ここってさあ……」

まあ、文句言わんと、ここで夜明かしをする事に決めた。

車の時計は午前2時を指していた。

そして、そのコンビニは。

出発前に、缶コーヒーを買い込んだ店だった。

夜明けと共に車を走らせた。

すると、あの看板。二人とも、嫌な顔つきで互いを見た。その矢印……。夕べ見た時とは反対方向を示していた。

自分達が進んだ方向には、古びた木製の看板が……。

『古戦場跡』

墨文字の小さなヤツが立っていた。

やっとの思いで戻ってきた、馴染みの街。ほこりまみれの車を洗おうと、そのままコイン洗車場に向かった。車を降りて、背筋に冷たいモノが流れた。

大小の無数の手形。

無言のまま、二人で車を洗ったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0877j/>

ドライブ

2010年10月15日21時25分発行